

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般推薦 I 期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、哲学・倫理学の研究者である古田徹也^{ふるたてつや}さんが、庵功雄^{いおりいさお}氏の著作『やさしい日本語』を引用しながら、〈やさしい日本語〉について述べたものです。文章中に書かれている〈やさしい日本語〉の意義について要約しなさい。また、あなたが日本語ネイティブではない人とコミュニケーションをとる場合、具体的にどのようなことを心がけたいと思いますか。要約と合わせて600字以内で述べなさい。

※ 文章中の引用文は全て『やさしい日本語』による

日本語学・日本語教育学者の庵功雄さんが著した『やさしい日本語』は、簡略化された〈やさしい日本語〉の概要を示しつつ、社会におけるその重要性を指摘しており、非常に参考になる著書だ。

そこで提唱されている〈やさしい日本語〉とは、簡単にまとめるならば、(1) 語彙を絞る、(2) 文型を集約するなどして文法を制限する、(3) 難しい表現を噛み砕く^か、といった方法により、特定の障害のある人や在日外国人などにとっても習得や理解がしやすいように調整された日本語のことだ。

この〈やさしい日本語〉は、災害時における行政やメディアによる広範な情報発信という用途のほか、平時においても、多様な人々が暮らす日本の地域社会の共通言語として用いることによって、社会的包摂^{※注1}や多文化共生につながることを目指されている。具体的には、たとえば、

「地震直後に必要となる水や保存食はもちろんのこと、給水車から給水を受けるためのポリタンク等も事前に購入しておきたい」

という日本語ネイティブ向けの防災の呼びかけは、

「地震のすぐあとのための水や食べ物はとても大事です。水をもらうときのためのポリタンク（水を入れるもの）も買ってください」

といった文章に言い換えることが推奨される。

同書中で紹介されているエピソードの中で特に印象深いのは、聴覚に障害のある一人の男性のエピソードだ。彼はろう学校で必死に日本語を学んだが、彼の母語である日本手話が日本語と大きく文法体系が異なることなどもあり、敬語の使い分けや助詞の使い方などはうまく習得できなかった。就職後、彼が「てにをは」の不自然な文——たとえば、〈仕事が終わらせる〉など——を書いたりすると、周囲の同僚にからかわれたり、蔑^{さげす}まれたりするようになり、相当の辛苦を味わったという。同様のつらい思いは、日本で働く在日外国人なども少なからず経験していることだろう。

日本語を母語とする者が高度に使いこなしているものを皆が従うべき「規範」として立て、そこから逸脱した使用を嘲^{あざけ}ったり厳しく注意したりするのでは、社会的包摂や多文化共生からは遠ざかるばかりだろう。むしろ、「日本で安心して生活するために最低限必要な日本

語」を基準に皆が日本語の学習やコミュニケーションのあり方を考えていくことは、特定の障害のある人や在日外国人などが「日本の中に自らの「居場所」を作る」ことにつながりうる。

以上の指摘は非常に重要だ。〈やさしい日本語〉を知恵を絞って構築し、日本語教育の現場などに普及させて日本語習得のハードルを下げることは、たとえば移民など、この国の地域社会で生きていく必要のある人々にとっても、また、彼らと共生していく日本語ネイティブの住民にとっても有益であることは間違いない。

さらに同書では、〈やさしい日本語〉はそのほかの点でも日本語ネイティブ自身にとって大いに恩恵があると指摘されている。私も含め、日本語ネイティブはしばしば、「「適当に言っても通じる」というある種の「甘え」」のなかにいる。たとえば、企業でも官庁でも大学等々でも、自分でもよく分かっていない曖昧な業界用語を^{※注2} 符丁のように用いて、仲間内でうなずき合って過ごす、というのはよく見られる光景だ。また、無駄に難しい言葉をこねくり回して立派な話をしているように見せかける、というケースもしばしばあるだろう。

そうした甘えや幻惑から脱して、自分とは異なる背景を有する相手の立場に立ち、物事を分かりやすく表現して伝えようとすることは、多くの場面でコミュニケーションの成功の機会を増やしてくれるほか、物事のより明確な理解や、より多角的な理解を促進してくれるだろう。

※注1 社会的^{ほうせつ}包摂 … 社会的に弱い立場にある人々も含め、社会の一員として取り込み、支え合う考え方のこと。

※注2 符丁^{ふちよう} … 特定の仲間以外には分からないように仕立てられた言葉。

(古田徹也『いつもの言葉を哲学する』による・一部省略がある)

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般推薦Ⅱ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

小論文

次の文章は、人類学者である長谷川眞理子さんが、今の若い人たちを含め、日本人が自分の意見を表明しないことについて述べたものです。長谷川さんの意見を250字程度で要約しなさい。また、それに対する自分の考えを要約と合わせて600字以内で述べなさい。

もう10年以上前になるが、ある私立大学に勤めていたころ、環境問題を論じる一年生のゼミを担当したのだが、みんなが黙っているのが困った。その数年前に、アメリカのエール大学で教えていたときには、こんなことは全くなかった。みんな自分の意見を言いたくて言いたくて、中には発言すること自体を目的にくだらないことまで言う学生もいて、そういう発言を封じるのに苦労した。「言いたがり」と「言いたがらない」が競争したら、「言いたがらない」文化は負けると直感した。この違いはいったいどこから来るのだろうか？

一般的に、日本人は自分の意見を表明しない。まずは、その場にいる他者がどんな意見を持っているのかをいろいろと探る。そして、みんなとあまりかけ離れたことは言わないようにする。そうすると、異なる意見は表に出てきにくい。だからと言って、異なる意見がないわけではない。やがてそれが高じて不満がたまると、会議とは別のルートで表明され、対処すべく、また別のルートで調整することになる。

私は、こんなことが日本人の意思決定を遅らせ、社会を変えるプロセスを遅らせ、生産性を低下させている重要な原因の一つではないかと疑っている。

日本人のおとなの意識について、数多くの研究やアンケート調査がこれまで行われてきた。それらを総合すると、日本人の成人男性（お父さんたち）の多くは、自分の意見をしっかり持っている。ところが、自分自身、その意見を公にするかという点、あまりしない。なぜなら、そういうことをすると周囲に嫌われるから、というのが大半のお父さんたちの意見なのだ。

だったら、みんなで一斉にそんな「自己規制」はやめにして、誰でも意見を表明するようにすればいいではないか。これは実にくだらない自^{※1}縄自縛である——と以前の私は思っていたのだが、しかし、そうではないのだ。こんなお父さんたちは、あえて意見を言わないでいる自分をさしおいて、自分の意見を言う人がいると、不愉快なのだ。「そんなことをすると周囲に嫌われる」というのは、あたかも社会を客観的に観察して述べているように装ってはいるが、実は「そういうことをするやつは、私は嫌いだ」という自分自身の態度を表現しているのである。

私が若かったころは、これほどではなかったと思う。安保があり、ベトナム戦争があり、公害・環境問題があり、大学紛争があった。みんな、政治に関しても何に関しても、いろいろ議論していたと思う。それがなぜ、こんなに異なる意見を表明することを嫌うようになったのか？私が若かったころは、個人の自由を実現するために闘わねばならないと思っていた。

今は、個人の自由が実現されたのだろうか？私たちの時代に比べて経済的に豊かになったので、何でも好きにできるという自由は増えただろう。その上で、ネットなどの技術が急速に普及し、その利便性と個人の自由との間の^{※2}あつれきに関しては、あまり議論されない。

そして、今の若い人たちは、対立が表面化することを極端に恐れる。閉鎖的で個人の移動がしにくい社会では、意見のぶつかり合いは嫌われる。グローバル化した社会というのは、個人の移動やグループ形成が自由な社会のはずだ。そうならば、今の若い人たちが、私たちの若いころよりも自由なはずなのだが、なぜ、彼らは意見の対立が表面化することを嫌うのだろうか？

さまざまな意見をたたかわせ、それに対処するすべを身につけなければ、これからの世界で決してよい方向には進めない。日本は何かがおかしいと思うのは、私だけか？

（長谷川真理子『モノ申す人類学』による・一部省略がある）

※1 自縄自縛 … 自分で言った（した）事のために、自分で苦しむこと。

※2 あつれき … 内部の者同士が争いあうこと。不和。

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般推薦Ⅲ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、国連職員として働いている田島麻衣子さんが、自分のアイデンティティーを持つことの重要性について述べたものです。田島さんの意見を300字以内で要約しなさい。また、それに対するあなたの意見を、要約と合わせて600字以内で述べなさい。

どんなに長くある土地に暮らし、その場所の生活習慣になじんだとしても、私はその土地の人々からは、あくまで日本人として見られます。この動かしがたい事実気付いたとき、一刻も早く異国に溶け込もうと必死に努力していた私は安堵しました。他国の言葉を学び、さまざまな国の文化を学ぶ中であっても、私は日本人であり続けるべきなのだと思うと、自分の中に強い気持ちがわいてきました。

私の周りを見渡してみれば、世界を舞台に長い間、素晴らしい仕事を成し遂げている人は、自分のアイデンティティーをしっかりと維持しているように思います。五か国語を操り、各国の大使を務めた経験がある知人は、今でも母国の民族衣装を大切に持っています。アメリカでビジネスを成功させたフィランソロフィスト（慈善家）は、自分の出身地であるアルメニアに全財産を投入し、アルメニアにはまだ数少ない、現代的な設備を備えた学校を建設しています。

アイデンティティーへの自覚は、異質の集団に入ると、非常に大きくなります。そして、アイデンティティーが揺らぐと、個性あふれる集団の中で流されてしまいます。逆にここがぶれないと、どのような集団の中でも、しっかりと立つことができます。このアイデンティティーをきちんと持つために必要なのが、自国を取り巻く状況に対する「多角的な理解」と「静かなプライド」だと思います。

海外にいと、日本ではまず遭遇しない場面で、自国への理解度を厳しく試されることがあります。例えば、インフォーマルな食卓で和やかに談笑していたときに、突然、日本の捕鯨制度への意見を聞かれたりします。また、友人になった中国人と、カフェでおしゃべりしていたところ、急に、第二次世界大戦中の南京事件に関する個人的な見解を問われたこともありました。海外では、日本人が自分ただ一人という状態で、このようなかなり際どい質問やコメントが飛んできます。それも昼食や夕食を共にするといった、日常生活の一場面での話です

日本国内で、日本人に囲まれながら、日本語で自分の思うところを述べるのと、海外で、外国人に囲まれながら、その場にいる唯一の日本人として英語で自分の考えを述べるのでは、雰囲気だけをとっても雲泥の差があるでしょう。おそらく、このような問題には、唯一絶対の正解というもの存在しないと思います。大切なのは、目の前の異なる立場にある人々がどのような見方をするのか、また相手の文化的バックグラウンドがどのようなものかに配慮した上で、自分の意見の表現方法を決めることではないでしょうか。

仮に、捕鯨に関して強い拒否感を持つ人々が目の前にいるとしましょう。そして、自分は

捕鯨賛成の立場を取る人間だとします。自分の信念を曲げずに、なおかつ相手との感情的なしこりを残さずに、この場を切り抜きたいのであれば、「このような立場とこのような立場がある」と事実関係の分析にとどめ、意見は差し控えるのが賢明だと思います。

また、「静かなプライド」も、広い世界で働く場合に、その人に安定をもたらしてくれると思います。「私の国はこんなにすごいんだよ！」と人に言われる機会も少なくありませんが、それを笑顔で受け入れられるのも、私自身が日本人であることに誇りを持っているからだだと思います。

日本に住んでいたときはあまり意識していませんでしたが、最近、日本は個性豊かな国だと確信するようになりました。四季に応じて移ろう景色や、繊細で豊かな食文化は、世界の全ての国で見られるものではありません。また、いろいろな問題が山積みではあるものの、日本は安全で、社会のシステムがかなり高いクオリティーで機能しています。

ただし、自分の国に対する誇りやプライドは、前面に出過ぎてしまうと鼻に付くものですので、内に秘めておくぐらいがちょうど良いと思います。どこの出身であろうと、自分のルーツを大切にしている人は強い。世界で生き生きと働く人々を見ていて、思うことの一つです。

(田島麻衣子『世界で働く人になる！』による・一部省略がある)